

「メンデル家12人兄弟館の書」について (5)

坂 本 信太郎

1. はじめに

「メンデル家12人兄弟館の書」第一巻の紹介も、本稿において完了の運びとなった。

今回執り上げるのは「メンデル家12人兄弟館の書」第一巻の索引番号 135. (Amb. 317.2°, M-Bd. 1, 3Nr., 135., Stadtbibliothek Nbg.) から 167v. (Amb. 317.2°, M-Bd. 1, 3Nr., 167v., Stadtbibliothek Nbg.) までの、最後の66葉(うち一葉は欠落)についてである。従来と同様、その肖像画と、ここに附されている、描かれた人物の経歴を紹介し、これについての若干の説明を記す。

尚、本稿も、前稿(3), (4)に引き続いて、昭和59年度、早稲田大学商学部鹿野研究振興基金によるものである。

2. 「メンデル家12人兄弟館の書」

135. 真鍮板展伸工

1519年、聖燭節の4週間前、真鍮板叩きの Eberhart 死す。8年間を兄弟館の一員として過した。268番目の兄弟。神の御恵みを。(1519年の作画)。

115v. (早稲田商学312号, p. 120) の模写である。

135v. 真鍮板板金工

1519年, 聖燭節(2月2日), 板金工の Vlrich Schuch 死す。兄弟館には14日間しか居なかった。269番目の兄弟。神の御恵みを。彼の手控えには, 前は錠前屋であったと記してあった。(1519年の作画)。

117v. (早稲田商学312号, p. 123) の粗雑な模写である。

136. 毛羽立て工

1521年, 聖ガルスの日(10月6日), 年長者の Hans Forchhammer 死す。織物工であり, 13年間を兄弟館に過した。270番目の兄弟。神の御恵みを。(1521年の作画)。

6v., 45v., 及び 131v. (早稲田商学302号, p. 181, Fig. 14; 305号, p. 175; 312号, p. 139) の作業図と同一である。

毛羽立て工は, 織り上ったばかりの毛織物布地を調整し, 製品に仕上げる工程の一部を担当する職人である。

毛羽立て工は兄弟館の制服に, カプチン頭巾をデフープレに着け, バンドには財布を下げ, 山高のフェルト帽子を被っている。天井の桿から下げられている布地を, オニナベナ製の道具を用いて毛羽立てている。ここには, 6v. に見られたような低い床几がないので, 布地は直接床面に折り重なっている。

136v. 刀鍛冶屋

1522年, 復活祭の前夜祭当日, 年長者の Hans Fleyschman 死す。兄弟館に4年間を過した。271番目の兄弟。神の御恵みを。(1522年の作画)。

角材を組んだ平天井と, ブッチェンガラスの入っている四角い大きな窓のある仕事場で, 刀鍛冶は3本脚の腰掛けに座し, 短い柄の重そうなハンマーで刀を打っている。壁際の机上には鍛え終えた製品が置かれている。赤壁面の棧にはヤスリが3本さしこんである。

鍛冶屋は館の制服に, 革製の前掛けをし, 縁のある帽子を被っている。ベルトには財布が下がっている。

137v. 財団理事者

1522年9月1日, Hansß Volckmer, 12人兄弟館の理事者となる。53歳であった。彼には・Margarete, 旧姓 Tucherin (1477~1513) と Anna, 旧姓 Harstorfferin (1560年死亡) の2人の夫人がいた。5年半の在任中に, 10人の館の兄弟が死亡した。彼も亦1528年(最後の2桁の数字は, 青白いインクで塗りつぶしてあるので確定できないが, どうやら28のようである)に死去した。神の御恵みを。(1522年の作画)。

ところで, 上記の公式記録文書に引き続いて次のような文章が更に記されていた。しかしこの補足的な文章のすべてと, 上記公式記録の中の数字の一部は, 不体裁にも後日, 青白いインクで塗りつぶし, 消去されてしまったのである。幸いこの消去の仕方が不完全であったので, 次のように判読することが出来た。「他の記録によれば, 彼は理事者の職を解任され, 代って Endress Imhoff が即座に理事者に選ばれ, 就任した。」と。実は, 1528年は Hans Volckamer の死去の年ではなく, 彼が理事の職を解任された年だったのである。彼が死去したのは1536年の初めだった。この当時, 一般的に, 関係している職務は, その死去によって解任されるのが慣例であった。その為, 書記が公式の理事在任記録簿から誤って, 解任された年を死去の年として記入してしまった。そしてこのことが, 後日の消去をもたらすにいたった次第なのである。

図には人物像ではなく, 紋章のみが画かれている。円形に束ねた草花に囲まれた理事者 Hans Volckamer 家の紋章を中央にして, その下部, 左右両側に Tucher 家と Harsdörffer 家の紋章が画かれている。

137v. 袋物, 財布作り

1522年12月31日, 袋物, 財布作りの年長者 Hanß Kryebl 死す。53歳であった。3年と8週間を兄弟館に過した。272番目の兄弟。(1522年の作画)。

職人は, 低い背もたれのある, 脚の高い3本脚の椅子に座し, 両足を机の横棧にかけている。身を深くかがめて袋物を縫っている。机上には出来上った財

布や袋物が置いてある。仕事部屋は、^{オウプテ}格縁丸天井を支えるルネサンス風の円柱が林立している豪華な建物である。作業機の傍の小さい3本脚の腰掛けには、ブリキの蓋付水差が置いてある。

138. 甲冑磨き工

Fig. 134

1523年9月13日、年長の兄弟 Herman 死す。65歳であった。彼はニュルンベルク市近郊の町で甲冑磨きをしていた。8年間を兄弟館に過した。273番目の兄弟。(1523年の作画)。

青い兄弟館の制服の上に、カプチン頭巾をデフーブレにまとい、つばの広い黒のフェルト帽を被った甲冑磨きが、大きな水力運転の研磨車でカブトの面頬を磨いている。研磨車の大きな車輪の円周面には、研磨用の革が張りつけてあり、研磨材をつけた製品をこの面に当てて磨くのである。2台の研磨車が同一



Fig. 134. 甲冑磨き工
(Amb. 317.2°, Bd. I, 138
Stadtbibliothek Nbg.)

回転軸に並べて取りつけてあり、水車により調子良く運転されている。職人が腰掛けているベンチの上には兜や胸甲が、そして床上にはすね当てが見える。

ニュルンベルクでは1471年に既に水力利用の研磨機が作られていたと言う。亦、革をつけた円盤研磨機についての記述は、1480年のレオナルド・ダ・ヴィンチの手稿 (Codex atlanticus. Fol. 7r-b.) に見られる。大型水力研磨機については1580年の Ioannes Stradanus の銅版画シリーズの中にも画かれている。

7v. 101v. (早稲田商学302号, p. 182, Fig. 15; 312号, p. 102, Fig. 104) 及び Landauer 12人兄弟館の図 (1568年) を参照。

138v. 梳き刷子作り

Fig. 135

1523年11月8日、年長の織物工 Hanß Speufeger 死す。彼は新聖霊病院 (1333年, Konrad Groß 寄贈) に9週間入院していた。兄弟館には2年と7ヶ月を過す。274番目の兄弟。(1523年の作画)。



Fig. 135. 梳き刷子作り
(Amb. 317, 2°, Bd. I. 138v.)

梳き刷子作りは左手で頬杖をつき、机に寄りかかりながら、右手に持った梳き刷子用の板を眺め思案している。机上には針金の巻き束と思われるものを掛けた架台と、梳き刷子用板、そして道具らしいものとガラスのコップが置かれている。この文書では梳き刷子作りを織物工と呼んでいるが、それはこの職人は毛羽立て工、剪毛工と同様、織物職人と全く類縁関係にある職人だからである。

梳き刷子は、からまっている毛を梳いて、ばらばらに解きほごし、繊維の方向を揃え、紡績出来るようにする為の道具である。同時に繊維に混じているごみを取り除き、つやを出しふんわりと柔かなものに仕上げる。

梳き刷子は凡そ 23×15cm 程の一对の板で作られている。各々の板の片面には皮が張っており、その皮には皮の裏面から鉄或いは真鍮製の針金の歯が斜めに通されていて、細かく植えてある。また板には取手が中央に釘でしっかりと打ちつけてある。2枚の板の針面の間に、毛のかたまりを少しからませ、ゆっくりと引っかく。これを 2・3 回交互に行なうと、毛が針の間にむらなく整然とならび、梳かれるのである。

このような金属針製梳き刷毛についての記載は、13世紀のフランスに見られ



羊毛を梳いてる男性
1479年頃の絵から



羊毛を梳いている女性
1338年、ラットレル「詩篇」から

Fig. 136.

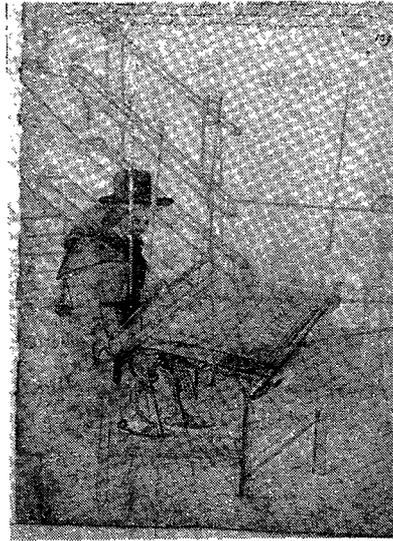


Fig. 137. 毛布織工
(Amb. 317.2°, Bd. I, 139)

るが、図に描かれたのは1338年のラットレルの詩篇の挿絵が最初である。

139. 毛布織工

Fig. 137

1524年5月19日、年長の兄弟 Kuncz Meir 死す。彼は毛布織の職人である。4年と19週間に亘り兄弟館の一員であった。大凡50ペニヒのお金と、自分で織った毛布を遺した。275番目の兄弟。(1524年の作画)。

織工は右手に杼とを持ち、左手を箆オサに添え、色とりどりの糸で毛布を織っている。綜統ツクコフは織機の真上の桿の滑車を経た紐で吊られ、更に織機の下踏み板に結びつけられている。両足で踏み板を操作し、綜統を上げ下げして織るのである。職人が両足にはいている靴下は、爪先と踵の部分が露出するように切つてある。毛布織工は羊毛、太い麻糸亦は種々な動物の毛を混ぜて織り、飾り縁で縁取りして織り上げるのである。

この図では織機の正確な構造は知ることが出来ない。附図を参照されたい。

136 (本稿 p. 216) の模写である。天井から吊り下げてある樺が交差している。更に織り上がった長い布が二枚、乾燥の為に吊り下げてある。

140v. 釘製造人

1525年8月30日、年長の兄弟 Kuntz Peck 死す。彼は釘製造人であった。1年と12週間を兄弟館に過した。278番目の兄弟。(1525年の作画)。

釘鍛冶屋が金敷の前に座して、釘型用鉄板(釘用ダイス)で釘頭を鍛えている。金敷を据えた木台の傍にベンチがある。ベンチの上の平皿及び床上には出来上った釘が散乱している。鍛冶やのすぐ後の別のベンチには、もう一つのダイスが見える。石積で高く築かれている爐には、角材で組み上げた枠の中に2台のファイゴが設備されている。ファイゴの先端は爐壁を通して爐心にまで達している。てこの操作で、2台のファイゴが交互に動かされ、連続した給気が出るようになっているので、炭を激しく燃え立たせ、高温度を得ることが出来る。

141. 袋物・財布作り

Fig. 139

1526年5月26日、年長の兄弟 Hansß Rossner 死す。袋物・財布作りであった。1年と36週間を兄弟館の一員として過した。279番目の兄弟。(1526年の作画)。

白いふさふさした髻の財布作りは作業机に向って座し、長い糸で財布の首の部分縫っている。机上にはナイフ、ばね鋏、糸玉、材料の革それに金口のついた完成品の財布が置いてある。職人の足許には革の切り屑が散らばっている。室の壁には山高、つば広の粗毛製の帽子とケースが一箇掛けてある。亦樺には出来上った2種類の財布が吊してある。一つはガマ口のある財布で他はガマ口がなく口を紐で締める形式の財布である。

丸天井のある室の戸口からは遠くの山々が見える。

141v. 荷担人夫

1526年6月28日、年長の兄弟 Hansß Kopp 死す。荷担人夫であった。11年



Fig. 139. 袋物・財布作り
(Amb. 317.2°, Bd. I, 141)

と 6 ヶ月を兄弟館に過した。280番目の兄弟。(1526年の作画)。

財布が下がっているバンドを締め、白い粗毛、ツバ広の帽子を被った荷担人が、右肩にどっしりと重そうな袋を担いで運んでいる。簡単な手すりの曲り階段を地下倉庫に下りてゆくところである。地下倉庫の格子枠窓がちらっと階段の下に見える。彼も立派な白いアゴ髻をつけている。カプチン頭巾をデフーブレに着用し、半長の靴をはいている。

142. 料理人

Fig. 140

1525年12月12日、年長の兄弟 Heinrich Schlichtting 死す。料理人であった。5年と8ヶ月を兄弟館の一員として過した。281番目の兄弟。(1525年の作画)。

料理人は兄弟館の制服にカプチン頭巾をデフーブレに着け、頭巾からの長い垂れをバンドにはさみこんでいる。幅の広い前掛けを締め、足の甲の部分を広



Fig. 140. 料理人
(Amb. 317, 2°, Bd. I, 142)

く開けたストラップのついた、軽ろやかな短靴を履いている。木製の握りの長い金属製の柄杓を持ち、かまどの前に立っている。かまどは石で築いた平爐である。その上面に火が赤々と焰を上げて燃えさかっている。傍には2個の土製壺と、1個の青銅製鉢が置かれている。鉢は鍾型で、短かい3脚があり、縁に取手の環がついている。かまどの後の壁面には柄の長い、大小様々なフライパンが4個も並べて掛けてある。かまどの下部のアーチ状に大きくえぐられている空間は薪等を蓄えて置くのに使用される。土間は丸石を敷きつめて、固めてある。

142v. 財団理事者

1528年4月27日の月曜日、Endres Imhoff, 代々受け継いでいた市参事会員から選ばれて、12人兄弟館の理事者の地位を得た。37歳であった。彼には2人の妻があった。1人は Schlauderspacherin であり、もう1人は Reichin で

あった。

理事者 Endres Imhoff（在任期間1528～1533, 1579年死亡）は革製のシャウベ（16世紀前半, ドイツで好んで用いられた男性用のゆったりした長上衣である）を着ている。シャウベの前立て及び大きく折り返されて肩をひろく覆っている衿にはシベリヤ産の立派な毛皮が着いている。毛皮はデザインの為めの刈り込みを入れずに, 小さい毛皮を縫い合わせて作ってあるので無地にはなっていない。赤シャツの衿は, ぎざぎざなカット飾りのある立衿で, きちっと頸を締めている。彼は若い小樹の傍に跪づいて手を合わせている。その彼と向い合って, 右側に Ursula, 旧姓 Schlauderspacherin と Magdalena, 旧姓 Reich の 2人の夫人が跪づいている。彼女達は大きく翼のように開いている白絹のバルベット（12～14世紀中頃まで婦人に用いられた顎覆いのある髪覆いである）を被っている。そしてひだが細かく折られている長いケープを, 胸を大きくはだけてはおっている。ケープの下に着ている服は, 肩から胸許までローカットにはだけたネックラインで, タイトなデザインである。袖は手首までである。当時の流行にならって, 胸高にベルトを締め, 腹部を突き出させている。長い赤色の数珠を手にしてしている。各々の足許には Imhoff 家の紋章, Schlaudersbach 家, Reich 家の紋章が描かれている。

彼等の頭上遙かに, 聖界と俗界の支配者の象徴である三重宝冠と十字架のついた地球儀を手にした天帝の姿が浮かんでいる。天帝は雲上から理事者夫妻に祝福を与えている。

理事者の背後には, 教会の建物と高地の遠景が青味を帯びて展がっている。

143. 錠前作り

Fig. 141

1528年9月12日, 錠前師の Ulrich Hach 死す。12年間兄弟館の一員であった。282番目の兄弟。神の御恵みを。(1528年の作画)。

錠前師は堅固な縁どりの長櫃に座し, 作業台に向いている。作業台には鉄製のねじ式万力が固定されている。彼は万力に締めつけられ固定されている鍵に,



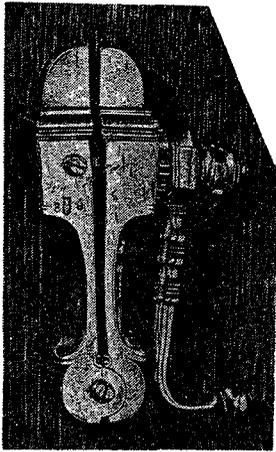
Fig. 141. 錠前作り
(Amb. 317.2°, Bd. I, 143)

力を入れてヤスリを掛けている。作業台の上に豪華な錠前金具や扉の飾り金具、蝶番、仕上がった鍵、南京錠の輪金、小形のヤスリなどが置かれている。亦万力の前に、万力の顎を開閉する為にねじを廻す四角孔のレンチ（回転具）が見られる。

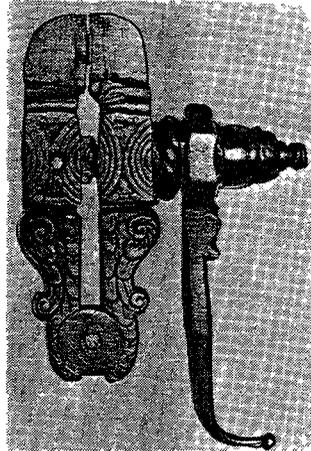
石積みの鍛冶炉には炭が白熱している。その右手の壁に開かれている丸弓形の窓からは遠くの間々が青く霞んでいる。

ねじ式万力の図は既に1505年の或る手写本*の中に描かれているが、それはねじ式万力だけの図で、木製（作業物をくわえる顎の部分のみ小鉄片が使用されている）のものであった。鉄製のねじ式万力を描き、しかも職人が実際に使用し、作業してる状態を描いた図としてはこの絵図が最初のものである。この点でこの図は大変に貴重なものである。

ねじ式万力の出現により工作物をしっかりと固定する事が出来るようになり、



鉄製/長さ17cm/1611
(Germanischen National
museums Nürnberg.)



鉄製/長さ17cm/17世紀
(Gewerben museum in
Nürnberg.)

Fig. 142. ねじ式万力

両手で工作を行う事も可能になった。従って精密・正確，より緻密な仕事が出来，あらゆる細工人達に大きな前進をもたらしたと言える。

錠前作りは世紀末頃，鍛冶職の中から分離独立し，専門職となった。南ドイツではアウグスブルク，レーゲンスブルク，ニュルンベルクが特に多く，そして栄えた。彼等は錠や鍵の他に鉤，留金，戸口・長持・戸棚の蝶番，飾り金具，把手等も作った。亦自動人形等のような機械仕掛けの装置にも巧みであった。錠前師達が一番気を使ったのは，複製品の出現であった。1329年，Bamberg市が，すべての鍛冶師に対して「こね粉，蠟，陶土などから鍵を模造することの禁止。違反者は5ポンド銀貨の罰金或いは職場からの追放」という法律を公布していることから知られるように，親方達の中には故意に合鍵を作る者がいたのである。亦盗人達が忍び込むのに好都合な方法をこっそり教えたりする者もいた。

錠前師達は、このような事から信用を損うことのないよう、互いに自戒すると同時に、真似の出来ない鍵の出現を目指し技術的研鑽に努めた。(ニュルンベルクの Hans Ehemann 親方は、1540年、文字や数字の組合せ錠を發明している)。

* F. M. Feldhaus, Eine Nürnberger Bilderhandschrift. Mitt. d. Ver. f. Gesch. d. Stadt Nürnberg. Bd. 31, 1933, S. 225 (Schraubstock). Bild dazu in: Technik der Neuzeit. Hrsg. von F. Klemm. Bd. I. Potsdam 1941. S. 10, Fig. 9.

143v. ブドー酒店主

1528年7月28日、ブドー酒店主の Concz 死す。2年間を兄弟館に過す。283番目の兄弟。神の御恵みを。(1528年の作画)。

酒屋の主人は戸外に横たえてある2本の酒樽を前にして座している。片方の樽の底板には真鍮製のコックが挿し込んである。そして転がらないように木材を台にして据えてある。コックの真下には、あふれた酒を受ける浅いタライ桶が置いてある。今、彼は中腹がふくらんでいるフラスコに酒を注ぎ込んでいる。この場所は小高い丘になっていて、彼の後には葉の茂った大木があり、その周囲は垣で囲まれた青々とした牧草地である。丘のはるか下の方に大きな農家が見える。

144. 針金製造人

Fig. 143

1529年4月12日、針金引きの Eberhart (姓の部分は消失して不明) 死す。1年間を兄弟館に過す。284番目の兄弟。神の御恵みを。(1529年の作画)。

作業台の両端に各々の心棒を固定した2本の円筒が据えられている。円筒の上面にはクランク・ハンドルが備え付けてある。2本の円筒の中間に針金用ダイスが垂直にしっかりと置かれている。針金はクランク・ハンドルを手廻して、一方の円筒から、ダイスを経て所要の太さに引かれ、他の円筒に巻きとられるのである。

仕事場の棚には、2本の円筒と製品格納用のブリキの箱がある。そして棚の

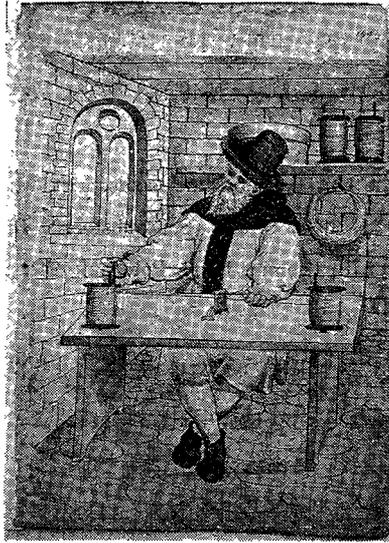


Fig. 143. 針金製造人
(Amb. 317, 2°, Bd. I, 144)

下には束ねた針金の輪が吊るしてある。

144v. 釘製造人

Fig. 144

1529年9月13日、釘作りの Jorg Kolb 死す。19年に亘り兄弟館の一員であった。285番目の兄弟。神の御恵みを。(1529年の作画)。

釘作りは真白な船乗り風の顎ひげをつけ、兄弟館の制服にカプチン頭巾をデフープレにして前掛をしている。3本脚の腰掛けに座し、大きな金敷の上で、長くて太い釘を鍛えている。釘を作るには、先ず細長い鉄棒から一端を尖らせた無頭の釘を鍛造する。このとき他端は太いままに残しておき、後で所要の形の釘頭に仕上げるのである。釘頭を仕上げる際には、釘型ダイス或いは図の金敷の傍に見られるような、釘型用の穴のあいている特殊な金敷を用いるのである。タイル張りの床上にある船形盆には出来上った小さい釘が一杯ある。その傍にはヤットコと、やや長い釘がころがっている。仕事部屋の隅には二方に口



Fig. 144. 釘製造人
(Amb. 317.2°, Bd. I, 144v.)

が開いている鍛冶炉がある。下段は炭入れになっている。煙は角錐状の炉の屋根を通して室外に導かれるようになっている。細長い鉄棒が真赤に燃え盛る炭火の中に挿し込んである。

19, 101, 140v (早稲田商学302号, p. 192, Fig. 27; 312号, p. 101; 本稿, p. 223) 参照

釘製造の歴史に関しては下記文献参照

F.M. Feldhaus, Die Technik der Vorzeit, der geschichtlichen Zeit und der Naturvölker. Leipzig 1914, Sp. 735/736 (Nagel)

O. Johannsen, Geschichte des Eisens, 3. Aufl. Düsseldorf 1953, S. 170-172.

145. らしゃ小売商人

Fig. 145

1529年10月の3日或いは8日(数字の部分が薄くなっており, どちらである

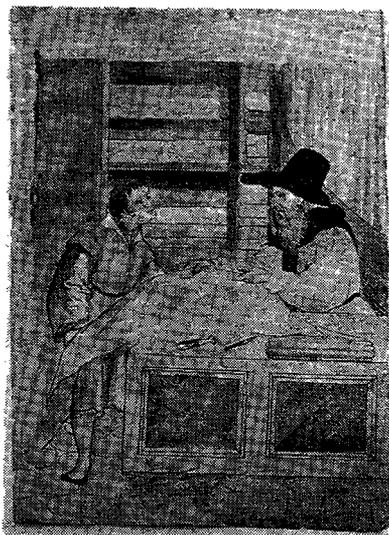


Fig. 145. らしゃ小売人
(Amb. 317.2°, Bd. I, 145)

か不明確), らしゃ小売人 Conz Esterreicher 死す。2年間兄弟館の一員であった。286番目の兄弟。神の御恵みを。(1529年の作画)。

太い格子枠に、美しい木目の板を正面に張った売台のうしろに小売人が立っている。店内には十字形に仕切った堅牢な棚が壁面一杯に作りつけてある。そして色とりどりの、たくさんの反物がきちんと積み重ねてある。棚には青いカーテンが天井から覆っている。

彼は今、カーテンをはね除けて、取り出したラジャ地を売台上に拵げて、織物の出来栄を自慢しながら顧客に熱心に奨めているところである。客の服装は白い開襟のついた袖無しの長衣に、当時流行の最先端の履物の、かもの口ばし形の靴を履いている。売台にはハサミとナイフが置いてある。

145v. 真鍮板展伸工

1530年4月6日、真鍮板叩きの Sebolt Scharb 死す。8年間を兄弟館に過

す。287番目の兄弟。神の御恵みを。(1530年の作画)。

ルネサンス風の欄干のある石敷の歩廊で、平らな木台上に載せた四角な金敷で、真鍮の帯板を真直に、平らに叩き伸ばしている。足許には叩き延ばした板が3枚ほど散らばっている。欄干際には束ねた材料が重ねて置いてある。

146. 靴屋

Fig. 146

1531年3月19日、靴屋の Herman (姓は欠除) 死す。8年間を兄弟館に過す。神の御恵みを。288番目の兄弟。(1531年の作画)。

三本脚の腰掛けに座し、膝の間にはさんだ靴を繕っている。傍の机には半月形裁断包丁と、裁断された皮及び靴木型が入っている一足の靴が置いてある。手包丁とも呼ばれている半月形裁断包丁はギリシヤ、ローマ時代まで遡ることが出来る道具である。床上の木台には2本の突き錐と屈曲した目打ち、そして床には裁ち屑の皮と、かもの口ばし形の様な一足の靴、縫い上った靴の片



Fig. 146. 靴屋
(Amb. 317, 2°, Bd. I, 146)

方が見られる。壁の3段になっている横棧には、種々な大きさの10組の木型が架けてある。丸弓形の大きな窓の上辺の棚には木型を入れたままの完成品が何足かあり、これ亦木型が入っている魚屋用の長靴が吊り下げてある。

146v. 背負籠担ぎ屋

Fig. 147

1531年12月3日、担ぎ屋の Ulrich Fogel 死す。7年間兄弟館の一員として過す。289番目の兄弟。神の御恵みを。(1531年の作画)。

節くれだった杖を左手に、荷物を入れた細長い籠を背負った担ぎ屋が重そうに身をかがめて歩んでいる。暑いのであろう、細い縁の、粗末な山高フルト帽を脱ぎ、右手に持っている。背負籠は彼の背丈の $\frac{2}{3}$ ほどあり、四段に仕切られているようだ。上部の蓋には南京錠が掛けてある。亦下部には脚がついていて、直接地面につかないようになっている。彼は今、砂利敷の路上、葉が散ってしまった黒ずんだ木の傍を通り過ぎるところである。眼前遙かかなたの丘陵



Fig. 147. 背負籠担ぎ屋
(Amb. 317.2°, Bd. I, 146v.)

に大きな城のある街が見える。

147. 屠殺人

1532年1月13日、屠殺人 Thoman Stapff 死す。1年と3ヶ月を兄弟館の一員として過した。290番目の兄弟。神の御恵みを。(1532年の作画)。

屠殺人の肉屋が牛の前頭部をめがけて斧を振り上げている。牛の右前の石畳みの床には、取手が2箇ある血受け用の小桶が置いてある。壁には既に処理した屠蓄が下げてある。

147v. 板鎧鍛冶

Fig. 148

1533年3月10日、板鎧鍛冶の Concz Falck 死す。4年間に亘って兄弟館の一員であった。291番目の兄弟。神の御恵みを。(1533年の作画)。

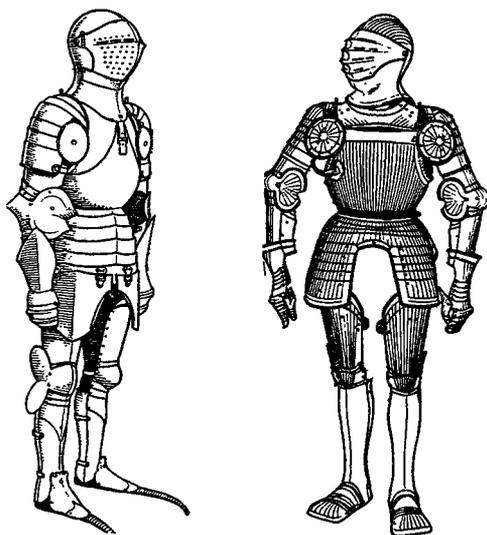
鎧師が鎧の胸甲をハンマーで打ち出している。金敷が据えてある大きな木台に、形の異なるハンマーが2本置いてある。打ち出しは一枚の薄鉄板を、熱しな



Fig. 148. 板鎧鍛冶
(Amb. 317.2°, Bd. I, 147v.)

いで、ハンマーと金敷だけで展延・成形するのである。打ち出す形に応じて、その都度、適切なハンマー及び金敷の形を選び、使い分けるのである。

仕事部屋の壁には完成したマクシミリアン型の胄と胸甲及び股の部分が掛けられている。マクシミリアン型の鎧は、甲冑技術に精通していたマクシミリアン皇帝が自から改良し、卒先導入した鎧で、15世紀末までの標準的軍装であったゴチック型に代って、16世紀初頭から出現してきたのである。どちらの型式も全身を完全密閉する型式であるが、ゴチック型は全体として角ばっていた。靴も先端の尖ったクチパン状であるに対し、マクシミリアン型は胸甲も胄も丸味を帯び、体にぴったりさせた型で軽かった。亦強度をより一層高めるために、全体に縦溝を平行につける等の工夫がなされていた。靴も先の丸まった“鴨の口ばし形”や“熊の爪型”のものが使用された。Fig. 149.



Gothic Style/15世紀 “Maximilian” Style/16世紀
(A Book of Armour Puffin Picture Book No. 95)

Fig. 149.

しかし、こうした改良努力にも拘らず、火器の出現と進歩は、密閉式武具の役割を終束せしめた。そして16世紀後半には単にトーナメント或いは礼装用具の地位に墮してしまい、遂には華麗な芸術品として余命を保つに過ぎなくなってしまう。

ドイツにおいて甲冑産業が著名であったのはインスブルック、ニュルンベルク、アウグスブルクである。

148. 大工

Fig. 150

1533年5月8日、大工の Albrecht Kestel 死す。4年間を兄弟館に過した。292番目の兄弟。神の御恵みを。(1533年の作画)。

大工は、2台の馬(台)に横たえてある太い材木を、手斧で角材に整えている。樹皮のままの側面を整えるのに、先づ適当な間隔に横に細いそぎ目を刻んでおき、次いで手斧で、その間をそぎ落すのである。大工の腰に下げているも



Fig. 150. 大工
(Amb. 317.2°, Bd. I, 148)

のは砥石のようである。或いは、砥石というよりも金剛砂の付いている木製の研ぎ棒かも知れない。大きな材木を力を入れてはつるので手斧の刃は傷みやすい。時々この刃を荒研ぎするのであろう。ヨースト・アマンの職人づくしの図の斧を振っている大工の腰にも全く同じものが吊るしてある。

148v. 荷造り人

Fig. 151

1533年5月14日、荷造り人 Bernhart Eberlein 死す。2年間を兄弟館に過す。293番目の兄弟。神の御恵みを。(1533年の作画)。

荷造り人は大きな商品の梱を、一本の短かい木製の棒^{コリ}を巧みに使って、太い縄でしっかりと縛り上げている。この棒はスパルトと呼ばれている。左肩から右脇に、予備の縄をかけている。仕事をしているタイル張りの部屋の石壁には鉄格子の入った丸弓形の窓が開いている。

110v. (早稲田商学312号, p. 114) 参照



Fig. 151. 荷造り人
(Amb. 317.2°, Bd. I, 148v.)

荷造り人に関しては下記文献参照

Joh. Ferd. Roth, Geschichte des Nürnbergischen Handels. Tl. 4. Leipzig 1802, S. 352-353.

149. 欠落である。

149v. 財団理事者

Fig. 152

1533年7月21日の土曜日, Sygmundt Helt, 代々受け継いでいた市参事会員から選ばれて12人兄弟館の理事者となった。彼には2人の妻があり, 1人は Vmbhawyn で他は Pyntlach の娘の Cuntzen Fuks である。彼の在任中兄弟達が何人死亡したかは記しそこねた。(1533年の作画)。

図の中央に理事者 Sigmund Held — Hagelsheim とも呼ばれていた— (在任期間1533~1540年, 1558年死亡) が立ち, その左右に二人の妻, Katharina, 旧姓 Unbehauen と Magdalena, 旧姓 Fuchs が並んでいる。



Fig. 152. 財団理事者
(Amb. 317.2°, Bd. I, 149v.)

理事者 Sigmund は当時流行の襷のある襟つき肌着の上に、毛皮の広襟のついたシャウベを着ている。シャウベの袖口の周り長く垂れさがっているもとの裾には黒ビロードの飾りが施されている。そして縁をはね上げたピレット帽を被り、“鴨の口ばし型”の靴を履いている。

二人の婦人はそれぞれ異った様式のバルベットの被り、共に細かいひだの長いケープを肩から胸までローカットに羽織っている。Katharina 夫人のケープは刈り込んでない縞模様の毛皮の裏地で、Magdalena 夫人のは刈り込んである無地の毛皮の裏地である。

理事者の足許には一族の勇者を示す紋章が、そして花のある樹の紋章が Katharina の、狐の紋章が Magdarena の足許に描かれている。

150. 小売商人

1533年 8月 6日、小売商人の Jorg Weinprenner 死す。6年間を兄弟館に過した。294番目の兄弟。(1533年の作画)。

店の丸弓形窓の落し戸を外側に倒した陳列台に、香辛料の入った小さい麻袋、円錐形に固めた白砂糖の塊り、反物の小梱そしてインチ目盛の物指棒が置かれている。カプチン頭巾をデフブレイにし、山高・広つばの黒い帽子を被った小売商人が、今、何かを皿秤で秤っている。店内の棚にも同じ様な商品がきちんと並べてある。

150v. 針製造人

Fig. 153

1533年 9月 29日、針作りの Herman Schmid 死す。27週間兄弟館に起居した。295番目の兄弟。(1533年の作画)。

針作りは3本脚の腰掛けに座し、左手で針製造用治具(Jig)を支え、体で作業台の縁にしっかりと押しつけて固定させている。この治具の浅い溝に適当な長さに切った針金を置き、この溝に沿ってヤスリを掛ける。そして針金の一端がどれも皆同じように削られ、尖った針が形成される。次いで他端を平らにし、穿孔する。更に小さい尖ったヤスリでこの孔を楕円形に削って針孔を作る。そ



Fig. 153. 針製造人
(Amb. 317.2°, Bd. I, 150v.)

れから焼入し、硬くしてから更に磨いて出来上るのである。

作業台には、切り揃えた針金が入れてある2箇の小皿と、数を数えて包むばかりになっている針が置いてある。亦台の縁には削って尖らした針を挿しておく針坊主が見られる。

1370年にはニュルンベルクの針作り業はもう始まっていた。そして16世紀には殆んどすべての国々に輸出するほど栄えた。針は鉄或いは真鍮の針金から作られるが、鉄製のものは縫針に、真鍮製のものは専ら留針用である。針製造業が針金製造業と密接な関係を持つことは言うまでもない。針金製造に水力利用が始まると針の製造は一層盛になった。

針作りは靴屋、毛皮衣料屋、仕立屋、製本、財布・袋物作りの使用する細かい針の外にししゅう針、編物針、荷造用の大針も作った。

針製造業に関しては下記文献参照

F. M. Feldhaus, Die Technik der Vorzeit, der geschichtlichen zeit und der Naturvölker. Leipzig 1914, Sp. 731~734 (Nadel).

P. Hundsdörfer, Die Entwicklung der deutschen Nähadelindustrie vom Handwerk zum Großbetrieb. Arch. f. d. Gesch. d. Naturwiss. u. d. Technik, Bd. 2, 1910, S. 364~379.

151. 針金製造人

1533年10月2日, 針金作りの Pernhart Eberlein 死す。4年間兄弟館の一員であった。296番目の兄弟。(1533年の作画)。

40v. (早稲田商学305号, p. 170, Fig. 46) と同様の作業図であるが唯左右が入れ換っている。ブランコは石壁に据えつけられているコの字形の鉄製の枠から吊り下げられている。

151v. 真鍮細工師

1533年10月8日, 真鍮細工師であり, 亦地方裁判所の弁護士でもあった Vlrich Vogel 死す。7年間兄弟館に起居した。297番目の兄弟。(1533年の作画)。

真鍮細工師はゴチック様式の机を前に, 幅の広い前掛けを腰からぐるっと巻きつけて, 箱を椅子にして座している。左手に持った燭台の蠟燭の心立てを, 机上に置いたヤスリに摩り付けて尖がらせている。鑄造された真鍮器具をヤスリでピカピカに磨き上げるのは大変な労力と時間を要する作業である。

作業台の上には種々な型式の燭台が並んでいる。亦壁ぎわの飾り棚には燭台と蓋付水差があり, 水差の傍に多腕の豪華なシャンデリアが吊り下げられている。

79v. (早稲田商学309号, p. 270, Fig. 83) 参照

152. 荷造り人

1534年4月18日, 荷造り人 Linhart Schuster 死す。4年間を兄弟館に過す。298番目の兄弟。(1534年の作画)。

148v. (本稿, p. 238, Fig. 151) の模写である。

152v. ヤスリ目立工

Fig. 154

1534年8月1日, ヤスリ目立工の Peter Pawernschmid 死す。2年間を兄弟館に過す。299番目の兄弟。(1534年の作画)。

山高, つば広の黒いフェルト帽を被り, 袖口の広い兄弟館の制服に前掛をしたヤスリ目立工が, 三脚腰掛けに座して仕事をしている。ヤスリ地金の両端に長い輪にした紐をかけ, そのはしを両足で踏み, ヤスリ面を金敷にしっかりと固定している。そしてタガネとハンマーでヤスリ目を刻んでいる。41. (早稲田商学305号, p. 171, Fig. 47) の時はヤスリ地金を片手で押えて, タガネハンマーで叩いていたが, 今度は自由になった両手でタガネをしっかりと正確にあてがい, 力を入れてハンマーを叩けるので, より深い目を整然と刻みこむことが出来るようになった。一段と進んだ方式である。15世紀, ニュルンベルク



Fig. 154. ヤスリ目立工
(Amb. 317.2°, Bd. I, 152v.)

ではヤスリ目立の技術が非常に栄えた。ヤスリ目立を自動的に行う機械の考案が1505年レオナルドによってなされている（アトランティコ手稿 fol. 6r. 附図参照）。**Fig. 155.**

仕事部屋の壁に沿ったベンチには、出来上ったヤスリ、仕上途中のヤスリ及びヤスリ地金が雑然と置かれている。側面の丸弓形の窓は5区劃に仕切られていて、ブッチェンガラスが入っている。

153. 給仕長、以前は染色工であった。

1534年9月7日、昔ニュルンベルク市郊外で染色工をしていた Kuntz Thannler 死す。彼は5年間兄弟館の給仕長を勤めた後、兄弟館の一員となり

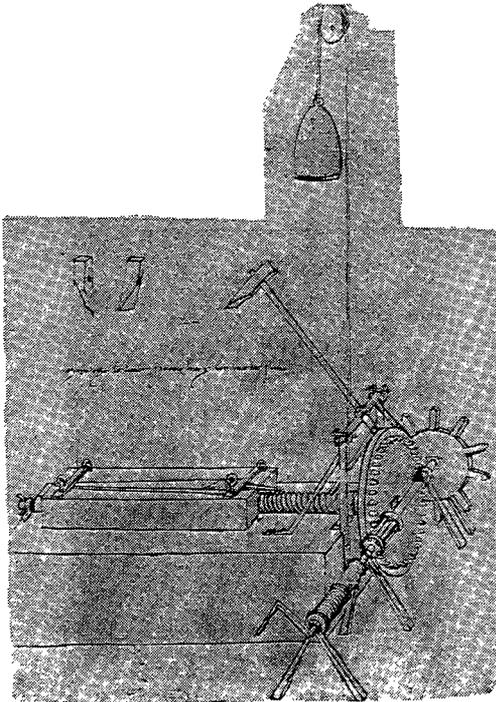


Fig. 155. レオナルド・ダヴィンチのヤスリ自動製造機

4年間を過した。300番目の兄弟。(1534年の作画)。

彼は兄弟館の制服ではなく、当時流行の幅広袖の、毛皮の裏地付シャウベを着ている。縁の広いフェルト帽を被っている。右の脇に2本の尖りパンを抱え、左手には大きな蓋付水差しを下げている。

草花と樹木のある庭の遙か遠方に、連った青い山々が見える。

153v. 文房具作り

Fig. 156

1535年10月17日、文具作りの Vlrich Huber 死す。6年間兄弟館に起居した。301番目の兄弟。(1535年の作画)。

文具作りは小刀をバンドに下げ、もじゃもじゃのつば広の帽子を眼深に被っている。作業机にはペンケースの小円筒が多数積み重ねてある。大きな箱が2個とインク壺が3個、そして出来上った組文房具が3組見える。組文房具は筆記用ペンを入れる小円筒ケースとインク瓶を紐で結び合せたものである。床上



Fig. 156. 文房具作り
(Amb. 317.2°, Bd. I, 153v.)

にも同様のものが散在している。腰掛けの傍の取手のない陶製の壺は糊入れであろう。ヘラが添えられている。

筆記用ペンケースは厚紙製である。インク瓶は木や角で作る。ペンは鶯鳥か白鳥の羽根の軸で作られる。西洋で鶯ペンが使用されたのは中世初期かそれより可成り早い時期であった。しかしイタリアを除いて、尚しばらくの間、古代からの葦ペンも用いられていた。その後鶯ペンが完全にこれに代ったのである。亦古代のインクは炭で作ったものであったが、中世に入ってから没食子によるブルー・ブラックインクが普通になった。

62. (早稲田商学309号, p. 246, Fig. 65) 参照

文房具の歴史に関しては下記文献参照

D. Diringer, *The hand-Produced book*. New York 1953, S. 544-563 (Inks, pens and other writing tools).

G.E. Waldau, *Vermischte Beyträge zur Geschichte der Stadt Nürnberg*, Bd. 4, Nürnberg 1789, S. 322.

154. 靴屋

1535年11月2日、靴屋の Ulrich Fürnpach 死す。9年間兄弟館の一員であった。302番目の兄弟。(1535年の作画)。

低い仕事台の前で三脚腰掛けに座し、靴屋は曲り目打で靴の片側を細工している。台の上には糸玉、突き錐それと縫糸の通りを良くする為に引く蠟の塊りがある。床には裁断用半月包丁や皮の切り屑、木型が散らかっている。亦壁の横桟には靴木型がさしかけてあり、陳列台には商品の靴が数足置かれている。

154v. 木炭計量士

1535年12月2日、木炭計量士の Hanns Hofman 死す。2年間を兄弟館に過す。303番目の兄弟。(1535年の作画)。

118., 121v. (早稲田商学312号, p. 123; p. 128, Fig. 122) の模写である。

155. 板鎧鍛冶

1535年12月25日、板鎧鍛冶の Vlrich Lochner 死す。2年間兄弟館に過す。304番目の兄弟。(1535年の作画)。

笠に似た縁なしのフェルト帽を被った板鎧作りがヤットコで押えた膏を鍛えている。通風孔のある、火の気のない鍛冶炉の壁面には、ヤットコが2挺とマクシミリアン型の鎧が4組下げてある。

155v. ランタン作り

Fig. 157

1536年1月14日、ランタン作りの Hanns Dürr 死す。2ヶ月間を兄弟館に過した。305番目の兄弟。(1536年の作画)。

山高、つば広の帽子を被ったランタン作りが切株の台に腰を下ろし半田鍔で、ランタンの底部を胴にハンダ付している。ランタンは金属薄板（鉄板或いは真鍮板）製である。胴部にはタガネで切り抜かれ窓が開かれていて、窓ガラス代りの角薄板（15v. 早稲田商学302号, p. 188, Fig. 22を見よ）の扉がついてい



Fig. 157. ランタン作り
(Amb. 317.2°, Bd. I, 155v.)

る。ここを開閉して蠟燭の挿入が行われる。この窓扉の真うしろには把手がついている。亦円錐形の屋根蓋には放熱孔があげてあり、吊り下げ用の環もついている。仕事台にはハンマーと半田が入っているブリキ皿があり、傍の木台にはタガネと穴あけ用具、そしてもう一つの木台には大きな鉄薄板用鋏が据えつけてある。職人の足許には、白熱している炭を入れた火鉢があり、半田鑊が挿し込んである。半田のような軟鑊は紀元前2000年既にエジプトでよく使用されていた。そして古代ギリシャ・ローマ時代には鑊付技術は高度に発展していた。

仕事部屋に大きく開いている横長の窓から遠く岩山に築かれている堅固な城が見える。亦眼下の丘陵には整然と耕されている畝地が拡がっている。窓の上部には商品のランタンがずらりと並べて吊り下げている。

半田付・鑊付技術に関しては下記文献参照

F. M. Feldhaus, Die Technik der Vorzeit, der geschichtlichen Zeit und der Naturvölker, Leipzig 1914, Sp. 636-644 (Löten)

F. Fuhse, Schmiede und verwandte Gewerke in der Stadt Braunschweig, Leipzig 1930, S. 85~90.

156. 毛布織工

1536年5月31日、毛布織工の Hanns Nöckl 死す。8ヶ月間を兄弟館に過す。306番目の兄弟。(1536年の作画)。

職人はフェルトの縁なし帽を被り、長靴を履いた足で踏木を踏んでいる。青、緑、茶の縞柄の毛布が織られている。

156v. 毛羽立て工兼武器庫夜警人

1537年2月19日、Wilhelm Aichler 死す。彼は染色工であり亦武器庫の夜警人でもあった。亦ニュルンベルク市の建築資材置物の管理人でもあった。2年間を兄弟館に過す。307番目の兄弟。(1537年の作画)。

オニナベナ製の毛羽立て具で反物を起毛している。天井に備てある3本の枠

から反物が垂れ下げてある。これは洗滌、染色された織物を起毛に先立って乾燥させているのである。

157. 桶屋

1537年3月6日、桶屋の Clas Speyman 死す。8年間兄弟館に過す。308番目の兄弟。(1537年の作画)。

職人は背丈程もある大きな桶のたがをタガネと独特な形の木槌で、しっかりと打ち込んでいる。桶の中腹には木栓をはめる孔があいている。

157v. 石工

1537年9月7日、石工の Hanns Helchner 死す。2年と6ヶ月間兄弟館に起居した。309番目の兄弟。(1537年の作画)。

茂った大木の傍で、山高の狭いつばのフェルト帽を被った石工が、つるはしを両手で握り、既に側面に溝を刻み込んだ石材を長方形に仕上げている。周囲にはたくさんの石材が散らかっている。仕上面の平滑を検査する直線定木が見られる。

158. 屠殺人

1537年11月4日、屠殺人の Hanns Planck 死す。2年6ヶ月を兄弟館に過した。310番目の兄弟。(1537年の作画)。

屠殺人(俗に牛殺しと言われている)が兄弟館の制服に前掛を締め、粗末なフェルト帽を被っているが、靴は当時流行の“鴨の口ばし”形(熊の爪形)の靴である。

取手が2箇所ある血受け用の浅底の桶を前に置き、雄牛の傍に立って屠殺用大斧を高く振り上げている。彼の後方の隅には羊が一匹うしろを見せている。屠殺場の床には丸石がびっしりと敷つめてある。

158v. 佐官屋

1538年7月4日、佐官屋の Hanns Kötl 死す。5週間を兄弟館に過す。311番目の兄弟。(1538年の作画)。

木骨構造家屋の壁にシックイの上塗りをしている。右手にコテ、左手にシックイを載せた柄のある円板状受板を持っている。地面には水桶と、くさびで固定したシックイこねの木箱、そしてこね楯が見える。

159. 製繩者

1538年7月13日、繩作りの Steffan PeBolt 死す。2年間兄弟館の一員であった。312番目の兄弟。(1538年の作画)。

腰に麻の繊維を巻きつけた繩作りが、製繩道具（中心に鉤のついた回転十字形板、早稲田商学302号、16., p. 188, Fig. 23参照）の鉤にかけた繊維を少しずつ繰り出して後退しながら繩をなっている。床上には材料の麻束がころがっている。壁面には出来上った繩が吊り下げたある。

159v. 給仕長

1539年1月26日、給仕長（執事）の Merten PeBler 死す。3年間を兄弟館に過す。313番目の兄弟。(1539年の作画)。

給仕長は兄弟館の制服の上、マント状の毛皮で肩の部分を深く覆い、そして2幅ほどの毛皮の飾りを正面に長く垂れている。つば広のピレッタ帽を被り、バンドには鍵の束を下げている。そして物置小屋と豪華な飾りのついた切妻型の屋根及びゴチック式の飾りの足台を持った大きな、ガッシリした戸棚の間に立っている。戸棚の正面は観音開きの扉である。右手に持った大きな鍵で片側だけを開いたので、四区割に仕切られた各棚に、積み重ねられているパンの塊を見ることが出来る。小屋の前には蓋付の大きなスズ製容器が置かれている。

背後に見える母屋の壁には、鉄製十字格子を入れた丸窓がある。

160. 短剣作り

1539年3月2日、短剣作りの Hainrich Werrer 死す。5年間に亘り兄弟館の一員であった。314番目の兄弟。(1539年の作画)。

短剣作りが作業台でどんな仕事をしているのか余り明瞭に描かれていない。

どうやら、短剣の柄にヤスリを掛けているらしい。この図の万力はねじ式のものではなさそうだ。壁には山高の黒い帽子が掛けてあり、作業中の彼の頭には縁のない青いキャップが載っている。

160v. 革帯作り

Fig. 158

1539年9月28日、革帯作りの Hanns Pachman 死す。6ヶ月間を兄弟館に過す。315番目の兄弟。(1539年の作画)。

革帯作りはポンチ受けの穴があけてある特種な金敷の傍に座している。そして今バンドに鳩目穴をあける為に、穴あけ用器のポンチを当てて金具で叩こうとしている。仕事部屋の壁や陳列窓には、種々な色に染められた製品が並べられたり吊り下げられたりしてある。

職人は明るいすみれ色のキャップできちんと頭をしめているが、このような薄い亜麻布製のぴったりした頭巾を男性がかぶり始めてくるのは、13世紀以降



Fig. 158. 革帯作り
(Amb. 317.2°, Bd. I, 160v.)

のことである。この頭巾は単独にか或いは帽子の下に使用した。壁には同色の山高、鑄広帽子がかかっている。

161. 袋物・財布作り

1540年6月15日、袋物・財布作りの Jorg Schteiner 死す。19年間に兄弟館に過す。317番目の兄弟。(1540年の作画)。

財布作りは優雅な革財布を縫い上げるのに没頭している。大きな財布の表に小さい財布がいくつも縫いつけてあるのは、硬貨の大きさ、種類によって種々に入れ別けておく為のものである。亦財布には、締め口が金枠（ガマロ）になっているものと、紐を巻いて括るものがある。

仕事机の上にはナイフ、ばね鋏、糸玉といった道具と材料の革が見られる。袋物・財布作りは亦財布の枠金も作る。118v. (早稲田商学312号, p. 124, Fig. 118) 参照。

161v. 帽子屋

1541年1月10日、帽子屋の Fritz Schmidt 死す。4年間兄弟館に起居した。318番目の兄弟。(1541年の作画)。

木枠に三段の棧を取りつけた帽子掛けが、石積みの壁に掛けてある。掛けてある帽子は現今(1541年の事か?)流行のものばかりである。縁が丸く上に反っている帽子、山の低い帽子、前庇のある帽子、厚いフェルト製(剛毛製)のもの、毛皮製のものと種々である。

フェルト帽子は13世紀末頃から、先づ上流社会の人々の間に着用された。そして15世紀に入ると、今度は広く一般の人々の中に拡がり始め、大流行するに至ったのである。しかし、下級の労働者達も被るようになったのは、15世紀末から16世紀に入ろうとする頃からであった。

帽子屋の歴史に関しては下記文献参照

J. G. Krünitz, Oekonomische Encyclopädie, Tl. 27, Berlin 1783, S. 43-196 (Hut).

Der Filzhut, seine Geschichite und seine Herstellung, Berlin 1936.

162. パン屋

1541年5月4日、昔パン屋の職人であった Korn Hans 死す。14年間兄弟館の一員であった。319番目の兄弟。(1541年の作画)。

124. (早稲田商学312号, p. 132) の模写である。

162v. 肉屋

1541年3月20日、かつて肉屋であった Sixt Klaubenbusch 死す。約3週間に兄弟館に過す。320番目の兄弟。(1541年の作画)。

147. (本稿, p. 235) の模写である。

163. 庭師

1541年11月3日、庭師の Jacob Meir 死す。4年間兄弟館に過す。321番目の兄弟。(1541年の作画)。

広いつばの山高帽子の庭師が樹園を鋤で耕している。周囲には柳の枝で編んだ垣が囲らしてある。

163v. 指物師

1542年3月21日、指物師の Paulus Weydman 死す。3年間を兄弟館に過す。322番目の兄弟。(1542年の作画)。

作業台の側で指物師は鉋で板を削っている。板の上辺は作業台に打ちつけてある木銚で留めてある。木銚は作業台上に置いてある木槌でその都度叩いて、出したりひっこめたりされる。彼の前には、飾り金具のついた、ゴチック式の彫りのある足台のついた長持と、書写用斜面机がある。机には書籍入れの小間があり、丸弓形に切り込まれた台座がついている。石積の壁には二柄のおさ鋸が掛けてある。

164. 毛皮衣料製造者

1543年6月19日、毛皮衣料製造人の Jorg Olhoffenn 死す。6年間を兄弟館に過した。325番目の兄弟。(1543年の作画)。

職人は今、針を持って大きな革の縁かがりをしているようだ。仕事机にはばね鋏、糸玉、真鍮製の指貫きが置いてある。壁の桿には仕上がった2枚のリスの毛皮の肩掛けが吊してある。この肩掛けは、縫い合せたリスの毛皮の縁を刈り込まず、まだらに縞模様を残し、粋な仕立てになっている。そして肩掛けの両端には尻尾を房状にたらしして飾っている。

164v. 平鍋作り

Fig. 159

1544年1月11日、平鍋鍛冶の Michel 死す。6年間兄弟館に起居す。326番目の兄弟。(1544年の作画)。

職人が金敷の上に置いた柄付平鍋（フライパン）の底面を、打出し用の小槌で叩き出している。フライパンは細長い形の強い鉄板か亦は厚いブリキ板を材料にして作る。フライパンの柄は、その半分程の長さのところを手前に折り返し、弓なりに反り上げられている。

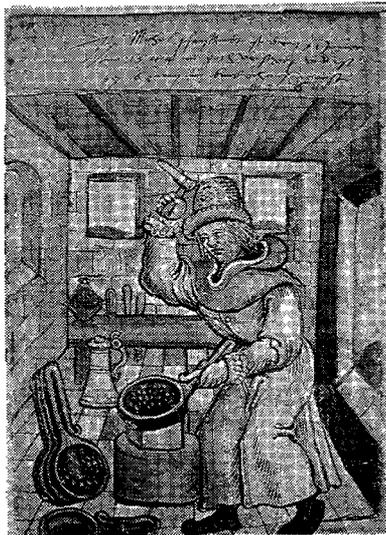


Fig. 159. 平鍋作り
(Amb. 317.2°, Bd. I, 164v.)

仕事部屋は石積み、板張り天井で窓がいくつも大きく開かれている。隅にあるベンチには緑色陶製のつぼとヤスリ、ヤットコの工作道具が見える。床はタイル張りで、出来上ったフライパンが積み重ねられている。亦錫製蓋付水差も置かれている。

職人は兄弟館の長裾・長袖の制服の上に、すみれ色のカプチン頭巾をデフブルーに着用し、同色の粗毛製の山高帽子を被っている。制服の袖口にはしゃれたレースのひだ飾りが3重についでいる。

165. ブドー酒店主

Fig. 160

1544年1月18日, Heffner 死す。327番目の兄弟。(1544年の作画)。

(彼が兄弟館に過した年数及び姓の部分は欠除して不明である。)

脚の高い専用の架台にブドー酒樽が据えてある。ブドー酒店の主人が、樽の前板に取り付けてある真鍮製のコックをひねって、升にブドー酒を量り出して

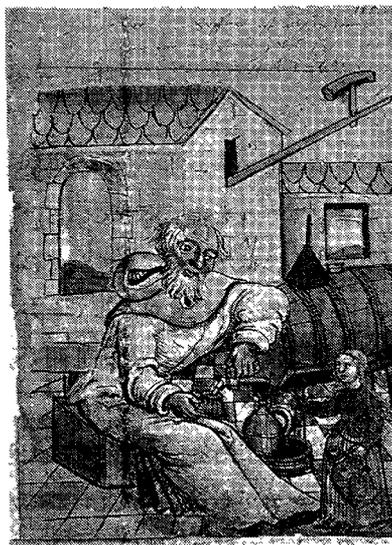


Fig. 160. ブドー酒店主
(Amb. 317.2°, Bd. I, 165)

いる。コックの下方，床上にはしたたり落ちる酒を受ける楕円形の平桶が置いてある。この桶の中に小さなジョウゴを挿し入れた取手付きの壺が入っている。主人は今この壺に酒を量り分けているのである。量り分け用の、もっと大きなジョウゴが樽の上に載せてある。

赤いびちとした上衣，細かいひだのスカートを着けた金髪の少女が酒を買いに来て，主人に硬貨を差し出している。

背後のスレート葺き屋根の家屋側壁から憧木のついた長い棒が突き出している。これは何であろうか？ この憧木は桶屋が使用するたが締用のハンマーに似ている。このハンマーで酒屋は酒桶の前板に呑み口のコックを挿し込んだり，はずしたり，亦木栓をあけたり閉ぢたりするのではないだろうか。そうであれば，図のように憧木を棒につき立てて高く掲げるのは，酒を売る準備が整ったので買いに来てほしいという合図，営業中という看板なのではなかろうかと考える。

165v. パン屋

Fig. 161

1545年8月3日，パン屋の Hans 死す。1年間を兄弟館に過す。328番目の兄弟。(1545年の作画)。

パン屋は棟瓦積みのパン焼き室の炉の前で，左側の壁に一箇所開いている窓口に，長柄木製のパン焼きシャベルを差し出している。この窓口から隣室の者が両手を出して，炉から今出したばかりの，焼きたてのパンを受け取っている。

炉はパン出し入れ口と，その側方の焚き口そして上方に3箇所の煙出し通風孔を具えている。焚き口及び通風孔には左右に押し開く引き戸がついている。パン出し入れ口は職人の肩程の高さに位置している。

床上には薪がきちんと積み重ねてある。亦左隅には大きなスズ製蓋付水差しとガラスのコップを置いたベンチがある。室が熱いので水を飲まずにはいられないのであろう。ベンチのうしろの壁には隣室へ通ずる飾り金具のついた扉が見える。



Fig. 161. パン屋
(Amb. 317.2°, Bd. I, 165v.)

166. なめし皮屋

1545年8月10日、なめし皮屋の Fritz Dietz 死す。5年間を兄弟館に過す。
329番目の兄弟。(1545年の作画)。

種々のなめされた皮が重ねて並べられている机に向って、なめし皮屋は仕上げ用ナイフで皮をきれいに調えている。机の端に柄のついた丸盆が置いてある。切り調えた屑皮を入れる為のものだろうか？

天井の桿には、なめし終っただけでまだ調えてない頭や尻尾のついた皮が下げられている。

職人は兄弟館の制服の袖口を折り返して着て、その上にカプチン頭巾をデフブレにし、せまい縁の山高粗毛製の帽子を被っている。

166v. オニナベナ製毛羽立て道具作り

Fig. 162



Fig. 162. オーナベナ製毛羽立て道具作り
(Amb. 317.2°, Bd. I, 166v.)

1545年12月19日、毛羽立て道具作りの Jacob 死す。14年間を兄弟館に過す。330番目の兄弟。(1545年の作画)。

職人は兄弟館の長衣制服にカプチン頭巾をデフーブレに着け、柔らかかそうなフェルト帽の広いつばを下向にそらせて被っている。そして脚が彎曲したX字形をしている作業機に向って、毛羽立て道具を組み立てている。

織り上げられたばかりの毛織物の表面は凸凹が甚だしく、ごわごわしていて到底商品にはなり得ない状態である。そこで先づ、くしゃくしゃにからまり合っている毛を起毛し(早稲田商学302号, 6v., p. 181, Fig. 14参照), 次いで刈り上げる作業(早稲田商学309号, 84v., p. 275; 90v., p. 284, Fig. 93参照)を何度も繰り返し行い、表面を調べ、滑らかな光沢のある織物に仕上げるのである。この時、起毛用に使用する道具が毛羽立て用道具なのである。

図にはその道具の製作過程を三段階に分けて描写している。先づオーナベナ

(ラジャ搔き草)若しくはアザミの穂先の部分と、軽い木で組立てた二重十字枠を用意する。次いでこの枠にオニナベナを密に並べ、オニナベナを挟みつけるようにして2本の横棧を重ね合わせる。そして紐を十文字にしっかり縛りつけて出来上るのである。

石積みの仕事部屋に大きく開いている半円形の窓からは、青々と茂る大木や青く霞む山並みが望まれる。

167. 短剣作り

1549年3月24日、短剣作りの Hans Schrötter 死す。15年間を兄弟館に過す。339番目の兄弟。(1549年の作画)。

短剣収納の立派な金具とがっしりした錠前の扉をつけた戸棚が見える。扉は半開きになっているので中の様子が分る。3段に仕切られた棚には束ねられ包装された製品の短剣が置かれている。図の右下半分が欠落しているので、これ以外は不明である。

167v. パン屋

1549年7月3日、パン屋の Hans Feierabend 死す。兄弟館には6週間を過した。340番目の兄弟。(1549年の作画)。

この図は左下半分が欠除している。165v.(本稿 p. 256)と同様の図で、パン焼き炉の出し入れ口の一部とその上にある引き戸つきの通風孔が分るのみである。

3. あとがき

「メンデル家12人兄弟館の書」、第一巻の終了に伴い、この巻についての術語対訳語表、索引等について掲載する予定でいたが、都合により後日の機会を待つことにした。

浅学非才のため、不適切な箇所が多々あることを危惧するものである。大方の方々の御叱正、御教示を頂けるならば幸甚の至りと存ずる次第である。

尚、「メンデル家12人兄弟館の書」の第二巻, 520葉, 第三巻13葉, 及び「ラ
ンダウア家12人兄弟館の書」, 第一巻, 301葉, 第二巻, 150葉についても, 今
後一層の研究・調査を続行し, 掲載してゆく所存である。 (1985. 8.21)

解説に際して参照した参考文献は, 一々挙げることを避けて, 一括して記載すること
にした。

参考文献

- (1) Das Hausbuch der Mendelschen Zwölfbrüder Stiftung zu Nürnberg. Deutsche
Handwerkerbilder des 15 und 16 Jahrhunderts. Herausgegeben von W. Treue
u. v. a., Bruckmann München, Textband und Bildband.
 - (2) Karl Fischer, Register zu den Mendelschen Zwölfbrüder Büchen den Stadt-
bibliothek Nürnberg.
 - (3) Margarete Wagner, Nürnberger Handwerker. Bilder und Aufzeichnungen
aus den Zwölfbrüderhäusern, 1388~1807, Guido Pressler Verlag Wiesbaden.
 - (4) Margarete Wagner, Das alt Nürnberg, Einblick in Vier Jahrhunderte Hand-
werksleben, Guid Pressler Verlag Hürtgenwalt.
 - (5) Ernst Mummenhoff, Der Handwerker in der deutschen vergangenheit, Eugen
Diederichs.
 - (6) Kulturgeschichte des deutschen Handwerks, von O. D. Potthoff, Hanseatische
Verlagsanstalt Hamburg.
 - (7) Alfred P. Zeller, Waffen des Abendlandes, Wissen Verlag Herrsching, 1980.
 - (8) A History of Technology, Vol. 1, 2, Edited by C. Singer etc., Oxford at the
Clarendon Press.
- 技術の歴史, 平田寛編訳, 第3, 4, 5巻, 筑摩書房, 昭和39年。
- (9) Das Ständebuch, von Jost Ammann mit Reimen von Hans Sachs, Erschienen
in Insel Verlag, 1960.

西洋職人づくり, 小野忠重解題, 岩崎美術社, 1970。

- (10) A Book of Armour, Puffin Picture Book, No. 97, by Patrick Nicolle, Jesse
Broad & Co. Ltd., Manchester, 1964.
- (11) Gewebe, Bildführed Kunsthandwerklicher Techniken Heft. 4, Gisele Reinek-
ing von Bock, Kunstgewerbemuseum Köln, 1981.
- (12) 鉄の歴史, ルードヴィヒ・ベック, 中沢護人訳, たたら書房 I, II, III巻。
- (13) ファッションの歴史(上), J. A. ブラック, Parco 出版局, 1981。
- (14) 西洋服装史, フランソワ・ブーシェ, 文化出版局, 昭和48年。
- (15) 服飾辞典, 文化出版局, 昭和55年。
- (16) 知られざるレオナルド, Pro. Ladislav Reti 編, 岩波書店, 1975。